

新しい小説のために

第二部 新・私小説論

第四章 「一人称」の発見まで

1.「た」の発見まで

(380)〈略〉シンプルに縮めてしまえば、「超越的一人称」→「世俗的一人称」→「ニュートラルな三人称」という一連のプロセスである。そしてそれは「人称操作者(作者)の作中人物に対するスタンス」の変化とパラレルであり、すなわち「作者性」の濾過の過程となっている。とするなら、その初源に存在していた「超越的一人称」が所有していたとされる種々の可能性は、どこかに置き去られてしまったのだろうか。〈略〉

しかし私は、それらは実は消滅などしておらず、ずっと密かに「人称」の内部に潜んでいて、そしてある時から、あたかもとつぜん息を吹き返したかのように、日本／語の「小説」の表面に浮上してきたのではないかと考えているのだ。

【超越的一人称が持っていた視点を一連のプロセスの中で失ったかのように見えたが、実は人称の内部に潜んでいて、小説の中に浮上してきたと。移人称等に至る源泉はもともと淨瑠璃等の世界にあったということか】

2.日本文学に「人称」はいらない？

(399)日本語の「私」には、英語でそれに相当する「I」とは大きく異なった存在理由、ある紛れもない過剰さ、畸形性、あるいはそれがほんとうに不要なのだとしたら、それでも尚、言葉の表面に思いがけず顔を出してしまって、いわば不条理な必然、謎めいた欲望のようなものがありはしないか。私たちが普段、ごく自然に読んでる「私」たちとは、要するに何なのか。「私」の異様さと不気味さ、そしておそらくその媚態と誘惑に気づいてしまったが最後、私たちはもう「私」と書かれた小説を、それ以前と同じように読むことは出来ない。私は「私」をやりすごすことは出来ない。

【日本語を英語の文法に当てはめていくことで省略可能な「私」が現れる。「私」と「I」には違いが生じる。「私」は省略が可能であるが、そこにお存在しようとする私とはなんなのかと】

3.人称と視点

(416)では「一人称」のままで「私」の限界を突破し、「一人称」を「私という言語上の現存を含むいまのディスクールの現存を表現する人」から解き放つことは出来ないのだろうか。あるいはそうしたとしたら、それは「天来の、他域からの、異界からの「声」」が鳴り響く、あの「超越的一人称」に逆戻りすることにしかならないのだろうか。 そうではないし、そうではない小説がすでにそんざいする。

【「私」のままで、「私」ではない視点で（「私」の視点なんだけど）、私（作者）が書くという世界を小説として存在させても良いのかと改めて思った（だって小説だもんね）。それは「私」の外にある超越的一人称ということかというと、そうではないと。超越するのではなくて、私（作者）として「私」の限界を突破するということ】

4.語り手から作者へ

「私小説」ほど「作者の作者性」が顕現された形式はあるまい。だが「三人称」で書かれた「私小説」も実は「潜在的な一人称なのだと考えられるなら、むしろややこしいのは敢えて「一人称」で書かれる「私の小説」ということにならないか。「三人称」の「彼」の背後に「私が居るのだとして、ならば「一人称」の「私」の背後には誰がいるのだろうか。そこにいるのは「語り手」か、それとも内包された作者」か、「作者1」か、「作者0」なのか、「作者の像」か、それともやはり「現実の作者」なのか。その全員か。何人いるのか。あるいは、そこには誰もいないのか。ひょっとしたら、いるのは、あるのは「出来事」だけなのか。語っているのは／存在しているのは「物語の機能」に過ぎないのか。そこで不斷に働いているのは「言語自体」だというのか、そうであるのなら、それを「私」と呼ぶべきなのか。それこそが「私」と私を、異なる同じわたしだと考えてみること。

【「私」を書く「私」を書く「私」を書く…と永遠に設定できてしまうが、最後は「」なしの私(作者)か。三人称を書く「私」が存在しているのなら、それは一人称を含んでいる】

第五章 いわゆる「移人称」について

1.渡部直己氏へのかなり遅い返信

(450)〈略〉しかし私は、山下作品の「わたし」の特異なあり方には、「動物がたまたま覚えてしまった手ぐせにもにた反復性」と切って捨ててしまうのはあまりにも勿体ない豊かで切実な「意味」があるのだと考えている。そしてそれは、柴崎友香の見るからにあっけらかんとした、それゆえに紛れもない奇怪さを孕む「移人称」とも、どこかで間違いなく通じ合っていると思える。そしてそれこそが、「私」の問題、「新しい私」の問題なのだ。もちろん、それは「新しい小説」の問題もある。

【実際の「私」では見えないはずの視点を書いていると断定するのは読み手のぼくであって、小説の私(作者)とは違う。小説の私(作者)にはみえる「私」の視点が存在するということを読み手のぼくが「私」とともにみる「新しい私」の世界】

2.柴崎友香と山下澄人

(476)極端に言うならば、ここに書かれたことの全部が嘘っぱちの出鱈目だったとしても、読者はそこに「私小説」としての事実性や真理性を読み出そうとすることを止め(られ)ない。

【私(作者)が書いた「私」の事実は、書いたものとして、私(作者)とのつながりは否定できない。私(作者)のなかにあるものが「私」として表出されているという事実からは逃れることはできない】

(477)「小説」とは、このようなことをするものである。

【面白さの源泉か。なかなか恐ろしい言葉でもある。このようなことができる。読者に事実性や真理性を与えてしまうものとしての「私小説」の存在の面白さと恐ろしさ】

(479)「私」は「世界」の内にあり、「世界」は「私」の内にある。言い換えればそれは「一人称」と「三人称」の区別など、ほんとうはない、ということである。

【どちらも行き来できるということか。世界が書いてるのでなくて、私が書いているということは揺るぎない事実としてあると思う。私（「私」は「世界」の内にあり、「世界」は「私」の内にある）】

(485)つまり「移人称」とは見せかけの問題に過ぎない。〈略〉「移人称」と呼ばれている現象は、技術や方法の問題ではなく、存在の態様の範疇なのだと言いたいのだ。

(486)〈略〉それを技術や方法として意図的に行なっている作家ももちろん居る。だが、そういうこととはまったく異なる動機と必然によってそうしている者、そうせざる得ない者がいるのであって、〈略〉いわば「世界」との対峙の問題なのである。

【技法としての移人称はあるが、そのように感じ取っている私（作者）にとってはそのようにしか表現できないということか。私（作者）と世界がそのように対峙していることの表現でしかない】

第六章 新しい「私」のために

(504)「私小説」は嘘をつく、「私小説」こそ虚構の最たるものなのだという事実にどこまでも意識的であり、そのからくりに苛烈な批判意識を抱きながら、それでも「私小説」を書こうとする者、どうにかして「私小説」の倒錯を逆転させようと試みる者だけが、眞の意味で「私小説作家」たり得る。

【ちょっと私小説の概念が変わった。自分の中の縛られた感じが抜けてゆく。私小説とは私が書く小説で、私の現実を事細かに書く小説とは言い切れないし、例えそのように書いたとしても、書き手がそのように説明したとしても、そうではないかもしれないという、からくりを持つことができる】

(505)すなわち「一人称の小説」には、それがどれほど現実離れした、荒唐無稽なものにみえたとしても、常に幾許かの真実性が宿っている、ということになる。

【私（作者）が書いてるからね】

(505)ひとつめの答えは、そもそもそれが「世界」の実相なのであり、「私」の実相〈略〉二つ目の、もっと重要な答えは、ようやく「小説」が、このような書き方／書かれ方をできるようになってきた、ということである。

【世界とはそもそもそのように私を超えて存在している。その世界を私が書くという、書き方／書かれ方をできるようになってきたと。そもそもそれはその時点で新しい感覚（チープな言い方ですが）の私（作者）が出てこないと小説はアップデートできないということなのか】

跋 批評の初心

(518)〈略〉批評にやれることは、歩行に付き合い、時々は一緒にやすんで、振り返ってそこに見える風景や、連なってる足跡を眺め、彼もしくは彼女が写真を撮ったならそれを見つめ、或いはその様子を自分も写真に写してみたりする、といったことしかない。

【「芸術について何ごとかを述べようとする際、」の批評家にやれることがわかりやすい比喩で書かれている】

(521)つまりは、批評家にとっては批評を創ることが「希い」である。〈略〉「希い」とは、「私」と呼ばれる、確かに後からやってきた筈の者が、先にやってきていた筈の者と、外からやってくるだろうものたちと、これからやってくるだろうものたちを、出迎えるための準備である。

【「者」と「ものたち」。「私」と呼ばれる〈略〉「者」(批評家)が、先にやってきた筈の「者」(=芸術、例えば～新しい小説まで)と、(外からやってくるだろう「ものたち」と、これからやってくるだろう「ものたち」)=「もっと新しい小説」を出迎えるための準備】